

メッセージアウトライン マタイの福音書6：5～8 「あなたが祈るときは」

[5]「また、祈るとき偽善者たちのようであってはいけません。彼らは人々に見えるように、会堂や大通りの角に立って祈るのが好きだからです。まことに、あなたがたに言います。彼らはすでに自分の報いを受けているのです」

前回6：1～4節では「報いを受けない施し」について教えられた。施しをするときには、人々にほめられようとしてやるのではなく、かえって隠れた施しをするべきで、そのような施しこそ神が報いてくださるという内容であった。今日の箇所からは私たちの祈りの姿勢について教えられたい。

ここで言われている偽善者たちとは今まで何度も登場している律法学者やパリサイ人たちのことである。「彼らは人々に見えるように、会堂や大通りの角に立って祈るのが好きだからです」と言われている。これは当時のユダヤ人は通常朝9時と12時と午後3時にはエルサレムにある神殿に向かって祈る習慣があった。たまたまその時間に外出中の律法学者やパリサイ人たちが、人の大ぜい集まる会堂や街角にそのまま立ち止まって祈ったことを指している。ちょうどその時刻に人の集まる場所にさしかかるようにしたとも言われている。立って祈るという姿勢にはいかにもこれみよがしな様子が見えがえる。彼らの目的は自分は祈っているのだという姿勢を見せて、あの人は信心深いとか、祈り深いと言って人々から称賛され尊敬されることにあった。しかしその結果、イエスの言われることには「彼らはすでに自分の報いを受けている」であった。彼らの受ける分は天において何もない。ただこの世において全額領収済みになっているというのである。

ここで私たちが気をつけなければならないことは、この箇所は自分たちとは関係ない、単なるあくどい偽善者について言われているのだと思いがちになることである。しかし、主にあつて新しく生まれた者とされた私たちクリスチャンでも祈りにおいて、また主との交わりにおいてこのパリサイ人たちのようにならないように気をつけなければならない。

では私たちはどう祈ればよいのか。それは次の6節に書かれている。

[6]「あなたが祈るときは、家の奥の自分の部屋に入りなさい。そして戸を閉めて、隠れたところにおられるあなたの父に祈りなさい。そうすれば、隠れたところで見えておられるあなたの父が、あなたに報いてくださいます」

祈るときには家の奥の自分の部屋に入るというのは何もわざわざ自分専用の祈りの部屋を作れということではない。それは大きな家に住んでいる人以外は物理的に無理なことである。ここで言われている、奥まった部屋に入り戸を閉めて祈りなさいとはそのような外見のことではなく、まず神以外のあらゆるものを忘れ、思いを神にだけ向けて祈るということである。それゆえどんなに忙しい社会人でも、また部屋数に余裕がない家であっても、はた目を意識せずに神だけを思い祈るならばそれは心の密室で祈ることになる。聖書を読むと主イエスはたびたび寂しい山に入って行って祈られたとあり、あのゲッセマネの園では弟子から少し離れた所に行き行って祈られた。またイギリスの有名な伝道者であったジョン・ウェスレーや弟の讃美歌作者となったチャールズ・ウェスレー

の母は多くの子どもたちの世話と家事に追われながら、そのただ中で密室で祈ることができた。それは彼女が祈る時には多くの子どもたちがいる部屋で椅子に座ってエプロンを顔にかけて祈っていたからであった。そして子どもたちは、お母さんが顔にエプロンをかけている時は静かにしているように言い聞かされていたのである。このような母の祈りのもとでイギリスの偉大な伝道者たちが成長していったのであった。

それゆえ私たちは、一人になれる部屋がないから祈れないなどという言い訳はしてはならない。

ところで祈りというものが個人的に神に思いを集中して祈るものであるならば、教会で信徒たちが集まって行われる祈禱会はどうなのであろうか。各人が順番で祈る教会もあり、全員が同時にそれぞれの祈禱課題を声高に祈る教会もある。→使徒 4:24-31、12:1-5

ここから分かることは祈りには二通りの祈りがあるということである。すなわち教会員が心を合わせて祈る祈りと、神との個人的な祈りである。教会の成長のためにはやはり教会員皆が心を合わせて祈る必要があり、そのために必要なのが祈禱会である。そして個人的な成長のためには密室の祈りが必要なのである。そして今日の聖書箇所では私たち個人個人の祈りの在り方に焦点が合わせられている。しかし、同時に何人かの者で共に祈る時でも神と一対一の関係に入るのであるからそれは密室の祈りとなりうるであろう。このように私たちがそれぞれ自分の奥まった部屋に入り、この世の騒がしい出来事に背を向けて祈るならば、隠れたところで見ておられる私たちの父なる神が、私たちの祈りに答えて報いてくださるというのである。

[7]「また、祈るとき、異邦人のように、同じことばをただ繰り返してはいけません。彼らは、ことば数が多いことで聞かれると思っているのです」

祈るときには、真の神を知らない異邦人のようにただことばを繰り返してはいけないというのである。異邦人のことばを原語のギリシア語では「バッタロゲオー」という。これはユダヤ人から見て異邦人がバッタバッタと訳の分からないことをしゃべっているように聞こえるので、そのようなことばをしゃべる彼らのことを「バッタロゲー」と呼ぶようになったという。それゆえ真の神を知らない彼らのようにただことば数が多ければ聞かれると思って、同じことばを繰り返すような祈りをしてはならないと言われるのである。

もちろん多くの時間を祈りのために費やすということは大切である。主イエスもたびたび夜を徹して祈られた。→マタイ14:23~25, ルカ5:16, 6:12 また「絶えず祈りなさい」とも言われている。→ I テサロニケ5:17

しかし、問題は祈りの中身であり、祈りの姿勢である。イエス・キリストを信じる信仰者の祈りが単に形式や時間をかけることだけを気にするようになったならば、それは主イエスが教える祈りの姿とは違ったものとなってしまっていることに気がつかなければならない。祈りは生きた神との交わりであり、私たちの苦しみや悲しみ、弱さや愚かさをも包み隠すことなく申し上げ、心を注ぎだし、また感謝をもって神の前に様々な願いを申し上げることなのである。そのようにして行くとき、私たちの肉の目には見えなくても、隠れたところで聞いておられるお方が私たちの祈りを聞き、必ず報いてくださるのである。

[8]「ですから、彼らと同じようにしてはいけません。あなたがたの父は、あなたがたが求める前から、あなたがたに必要なものを知っておられるのです」

神は私たちが祈るより先にすでに私たちにとって必要なものをご存じだというのである。これは私たちにとって大きな慰めである。神は聞いておられないのではない、耳をふさいでおられるのではない、どこか遠くにおられて聞こえないのでもない。ちゃんと私たちの祈りを聞かれ、その必要もご存じであるというのである。しかし、多くの方はそんなことは、自分の置かれている現状を見れば、にわかには信じられないと言うかもしれない。なんでこのような状況に長年置かれ、苦しまなければならないのか。なんですぐにこの状況から救い出されないのか……。

それはすぐに答えられることもあるし、時間がかかることもある。またもっと私たちにとって良いものをお与えになるために私たちを様々な試練や逆境を通らされること

もある。それは私たち信仰者がすでに多かれ少なかれ経験してきたことであろう。

→ヨブ記参照

祈りは決して神のご計画や決定を変更させる膝詰め談判ではない。祈りが聞かれるとは神からご覧になって私たちが必要であると認められたものが答えられるのである。世の親たちも子どもが欲しいものを何でもかんでも与えることはしない。もしもそのように扱われる子どもがいるならば、その子は甘やかされて、高慢で自己中心になり、だめになってしまうであろう。

私たちの心からの祈りを確かに聞いておられる神を信じ、信頼し、信仰をもって従い続けよう。

ニューヨークのある病院の壁に作者不明の患者たちによって書き加えられていった詩

「苦難にある者たちの告白」

大事をなそうとして 力を与えてほしいと求めたのに

慎み深く 従順であるようにと

弱さを授かった

より偉大なことができるように 健康を求めたのに

よりよきことができるように 病弱を与えられた

幸せになろうとして 富を求めたのに

賢明であるように 貧困を授かった

世の人々の賞賛を得ようとして 権力を求めたのに

神の前にひざまずくようにと 弱さを授かった

人生を享楽しようと あらゆるものを求めたのに

あらゆることをよろこべるように 命をさずかった

求めたものは一つとして与えられなかったが

願いはすべて聞き届けられた

神の意にそわぬ者であるにもかかわらず

心の中の言い表せない祈りは

すべてかなえられた

私はあらゆる人の中で

最も豊かに祝福されたのだ